BLEACH　～或いは、こんな未来～

穀潰し

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＢＬＥＡＣＨ　～或いは、こんな未来～

【Ｎコード】
Ｎ３１７５ＢＡ

【作者名】
穀潰し

【あらすじ】
妄想とモヤモヤと何かが抑えきれず、つい投稿。
タイトル通り、未来ネタ。
死神代行編までをベースに、消失編はノータッチで。
主役は不明。群像劇？
オリジナル設定、キャラ多数。
時系列テキトー、行き当たりばったり。
説明かっ飛ばし気味。
多少カップリングを出すつもり。

不定期更新。

……以上の要素が許容できるお暇な方は、どうぞお付き合い下さい。

一話　始まりの入隊試験（前書き）

第一話。
時点は、藍染の一件から３０年後ぐらい。有沢たつきが護廷十三隊の入隊試験を受ける所です。

……うん、死んでるんです。

一話　始まりの入隊試験

「受験生の諸君、ただ今より護廷十三隊入隊試験を始める」

皆の張り詰めた空気が漂う真央霊術院の大教室に、試験監督の声が響き渡る。

「試験内容は筆記試験と実技試験の二つである。まず始めに、この教室で筆記試験を行い……」

監督による説明をぼんやり聞きながら、私は周囲を軽く見渡した。

大半の人は私同様に霊術院生らしく、いつも通りの白い制服を着て、真面目に話を聞いている。

それに対し、小汚い着物を着た、見るからにガラの悪そうな奴らも少なからずいる。

頭は空だが腕は立つ、流魂街からの流れ者たちだ。

以前に先輩から聞いた話だが、どうやら入隊試験は、筆記と実技の両方ができないと駄目、と言うわけではないらしい。

どちらかが合格最低ラインに届けば良いらしく、ああいったチンピラ共にもチャンスがあるみたいだ。

ま、そう言う私も実技頼みなんだけどね。

きっちり六年間、霊術院で勉強したものの、授業内容なんて全く頭に入ってない。

まあ、だから……

「……それでは、回答開始っ！」

……睡眠開始っ！

私同様に突っ伏する音を聞いたのを最後に、私は一時の微睡みに入った。

☆

実技試験は護廷隊所有の大広間で行うらしく、試験監督に引率されながら向かっている。

ようやく出番だ、と肩を回していると、後ろから突然背中を叩かれた。

「たつきー、アンタ筆記試験中ずっと寝てたでしょ！？」

六年間同じクラスの夏目結衣だ。

態度は不真面目だが勉強はかなりできるらしく、二組ではテストで常に一位をキープしていた。

反面、実技がイマイチのせいか、一組には上がれず終いだったのを悔しがってたけど。

「まーね。私が頭アレなのは知ってるでしょ？」

「そーだけどさー、十一番隊になっても知らないわよ？」

「んー？　別に良いよ、それでも」

それを聞いた結衣は、信じられない、といった顔をしていた。

「ムサい男共に囲まれて生活することになるのよ？　臭いし汚いし

下品なのよ！？　女に餓えたケダモノの巣窟なのよ！！？」

「いや、それは噂とアンタの想像でしょ……。そういう環境には現世の頃から慣れてるから、私は平気よ」

結衣のテンションに若干ヒきながらも応えると、何やら神妙な顔をされた。

「……やっぱ不思議ねー、現世の記憶があるなんて」

「なによ、改まっちゃって」

「べっつにー、ちょっと羨ましいと思っただけよ」

記憶なんて、そこまで良いもんでも無いんだけど、確かに死神を目指す切っ掛けになった事を思うと、あって良かったのかもしれない。

その後も結衣とテキトーに喋りながら歩いていると、ようやく目的地の大広間に着いた。

そこには十人ほど、黒い着物を着た人たちが立っていた。

彼らに近づくにつれて、霊圧による重圧をひしひしと感じる。

「受験生の諸君。彼らが実技試験の試験官をして下さる、護廷十三隊の死神の方々である。どの方も第十席以上の席位を持つ大変優秀な死神だ。各人、全力で手合わせして頂け！」

「「はい！！」」

「では、各自で試験官を一人だけ選び、準備のできた場所から始めっ！」

試験監督の号令を合図に、皆が思い思いの試験官の下へ集っていく。

「たつきはどうするの？」

また結衣が話しかけてきた。

「誰でも良いけど、どうせなら強い人が良いかな……」

そう言って、試験官を観察する。

例年は二、三人は隊長格が来るらしいけど、白い羽織りの人も、腕に副章を付けている人も見当たらない。

できれば強い人と手合わせしたかったんだけどな……霊圧を探るのは苦手だし、見た目で選ぼうか。

そんなことを思ってると、前の方で同じことを考えていたのであろう話し声がした。

「隊長格はゼロか……ハズレだな」

「そう言うなって。一人ぐらいは強いのいるかもよ？」

やたらと上からの物言いをする二人組だ。

白い制服を着ている辺り、院生のようだけど。

「結衣、あの二人知ってる？」

「え？　あー、一組の人たちよ。名前は覚えてないけど、今年の六回生の中で指折りの実力らしいわよ」

「へぇ」

別に口だけじゃないみたいだけど、一流の死神に通用するのだろうか？

「お、アイツは強そうだ。あそこにしよう」

「そうだね」

そう言って二人組の向かった方では、坊主頭の死神が、受験生を文字通り蹴散らしていた。

「……あれは試験官として成立してるのかしら？」

引きつった顔で結衣が呟く。

「あー、多分駄目だと思う」

他の試験官が顔と名前をチェックしてから手合わせしてるのに、あそこだけ問答無用で殴りかかっている。

「たつき、他の人にしましょ。……あら、あそこの人なんてどう？」

結衣が示したのは、何故か受験生の数が極端に少ない、鮮やかな金髪に反して暗い雰囲気の人だ。

「なんであの人？」「真面目そうだし、怪我しなくて済みそうだからよ」

「あっそ……。まあいっか、行こう」

どの人も強いことに違いは無い筈だしね。

☆

試験官の所に行くと、丁度前の人が終わった所だった。

「君たちも僕が試験官で良いのかい？」

「はい。有沢たつきです、よろしくお願いします」

「夏目結衣でーす。よろしくお願いしまーす！」

「有沢君と、夏目君だね。僕は三番隊『第三席』、吉良イヅルだ。よろしく」

そう言うと、試験官の吉良三席はニコリと微笑んだ。

一話　始まりの入隊試験（後書き）

見苦しくも、補足を。

・有沢たつき
３０半ばで交通事故で死去。生涯独身。
生前に、死神や虚などと強く関わったため、記憶を有したまま尸魂界へ。
見た目は何故か高校一年の時の姿に。
精神面も、姿に引かれて若返り気味。

・夏目結衣
誰？（死
気が付いたらいたキャラ。
性格、見た目、実力、今後の活躍、全て未定。可哀相に……。

・吉良イヅル
三番隊『第三席』。降格しちゃった。
いつか、その理由のエピソードを書いてあげたい、作者のお気に入りの一人。

正直、どのキャラも見た目が定まってません……。作者にはビジュアルの想像力が皆無ですので。
見た目は好き勝手に妄想して下さると凄く助かります。

二話　スーパールーキーと高き壁（前書き）

今の所たつきメインで書いてますが、別に主役ってわけでも無いんです。

……いや、今後の展開なんて殆ど決まってないんでアレですが。

二話　スーパールーキーと高き壁

軽い自己紹介を終えたイヅルは、二人に試験について話し始めた。

「それじゃ試験内容を説明するよ。刀は試験官も受験生も、刃を潰した『浅打』を使用。時間制限は特に無いから、自分のペースで向かってくると良い。実力を見ることが目的だから勝ち負けに拘らず、斬拳走鬼、持ちうる力を出してほしい。……何か質問はあるかい？」

「ありません」

「大丈夫でーす」

「よし、では早速始めよう。どちらが先が良いかな」

そう聞かれた結衣とたつきは、互いを見やる。

「えーと、たつきからで良いよ？」

いざ本番と言われ、少し緊張しているのだろう。結衣はたつきに先を譲る。

「んじゃ遠慮せず、私からでお願いします」

「分かった。刀はこれだ」

順番が決まったことを確認したイヅルは先手であるたつきに、抜き身の刀を手渡す。

「ありがとうございます」

刃は潰れていても、充分に鈍器と呼べる重量だ。
現世の人間の体よりも遥かに丈夫な魂魄と言えど、痛覚があることに変わりはない。
受け取った刀を握るたつきの手に力が入る。

刀を渡したイヅルは、数歩下がって間合いを取る。

「さあ、始めよう」

向こうが白打でも打ち込みやすいように、刀は構えず腰に差した状態でイヅルはたつきの出方を窺う。

それに対し、たつきは刀を真っ直ぐに構え、ジリジリと間合いを詰める。

そして……

「ふッ！！」

たつきが一足で間合いを無くし、イヅルの頭目掛けて刀を振り下ろす。

空手の達人であるたつきの踏み込みだ。
研ぎ澄まされたスピード、タイミング、体の動き……並の死神では見切れないだろう。

「おっと」

しかし、イヅルは瞬く間に刀を抜き、たつきの刀をピタリと受け止める。

なかなかやるね。

そう言おうとしたイヅルだが、眼前には受け止めた刀しか無いことに気付く。

何が起きたのかを理解したイヅルは、ほぼ無意識の内に後方へ瞬歩で移動した。

ブオンッ！

イヅルの視界に映るのは、先程まで自身の頭があった所目掛けて、風切り音を響かせ宙から踵落としを放つたつきの姿だった。

「……チッ！」

ターゲットが消えたことが分かったたつきは、盛大に舌打ちをしながら着地し、イヅルの姿を探す。

「こっちだよ」

（後方から頭部を狙う。対虚におけるセオリー通りの攻撃だけど、えげつない威力と技術だなぁ……アレ、当たってたら死んだんじゃないかな？）

やや顔を青ざめながらも、イヅルはたつきに呼びかける。

呼ばれたたつきは足下に落ちている自分の刀を素早く拾い、もう一度正面に構える。

しかしその構えには些かブレがある。

たつきの霊力では、一度の瞬歩でもかなりの負担になるのだ。
（今のが避けられるのか……参ったな、一発限りの勝利策だったのに）
たつきの構えが更に固くなる。
イヅルもそれを感じ取ったのだろう。
ゆっくり近付きながら話しかける。
「どうだろう、もう少し続けるかい？」
その問いかけに、やや驚いた顔を見せたたつきだが、ニヤリと笑うと大きく返事をした。
「まだまだっ！！」
やや広めの距離をたつきが突っ込んでいく。
☆
「みんな、試験どうだった？」
「筆記も実技もまあまあね」
「私、筆記だけは自信あるなー」
「そりゃ結衣ならねぇ。チッピーは？」
「アタシ駄目かもなぁ……」

「えー？　大丈夫でしょ。実技で結構褒められてたじゃん」
たつきと結衣は他のクラスメートたちと共に、霊術院生の寮へ帰る道中おしゃべりしている。
試験が終わった脱力感と、もしかしたら離ればなれになるかもしれないという不安で会話が弾むのだろう。
「でも、アタシの次の子と比べたらさぁ……」
「あー、アレはちょっとねぇ……」
「なんか凄い人いたの？」
「ウチらの所で、試験官倒しちゃった人がいるんだよねぇ」
「ウソっ、マジで！？　特選の人？　男子？　女子？」
「特選の人。赤羽さんって言うんだけど」
「あ、知ってる。佐川くんと一時ウワサになってた子でしょ？　あれ結局デマだったのよねぇ」
「そうなの？　たしか、佐川くんも強いよね」
「ハゲ頭の試験官と勝負してたよ。負けちゃったみたいだけど」
「あのハゲの人強いよねー」
「ハゲの人と言えば、一組の二人組で、その試験官に挑んだ人いた

んだけど知らない？　結構強い人たちだったと思うんだけど」
「んー、秋山と木村かな？　あんまり相手にされてなかったなぁ」
「えー！　秋山くん強いのに！？」
「ハゲの人強いなぁ」
「ハゲ強いねー」
「たつきはどうだった？」
「私？　まあ、負けたよ」
「そりゃそうよ。相手は一流の死神なんだから当然でしょ」
「でも勝った子いるんでしょ？　悔しいなぁ」
「たつきは相変わらずねぇ。この前も……」
話題は尽きること無く、おしゃべりは寮についてからも続いた。
残り僅かな院生生活を惜しむかのように。
友に残され、また一年努力することを恐れるかのように。

二話　スーパールーキーと高き壁（後書き）

冬休み最後の足掻き。

後半に名前がポロポロ出てきましたが、別に覚える必要無いです…

…何人かは。

またもや見苦しい補足を。

・クラスについて

特選＝一組。紛らわしいね。

何組まであるかは不明。六組ぐらいじゃないかなぁ。

・実技試験について

試験官がそれぞれの裁量で実力を判断。

実技での合格者は、戦闘投入も早めに行われるので、結構厳しく付けられる。

ハゲの人を選んだ受験生は、後日再試験でした。

ハゲの人に試験官を頼んだ刺青の人は、後日各所から怒られました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3175ba/

BLEACH　～或いは、こんな未来～

2012年1月10日03時45分発行